

擁壁工指針（平成 24 年度版）の訂正

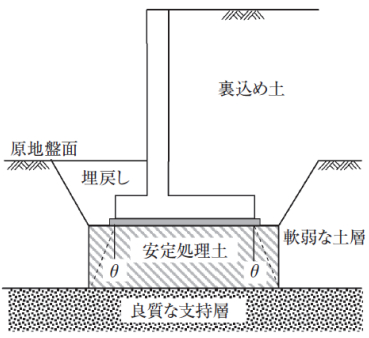
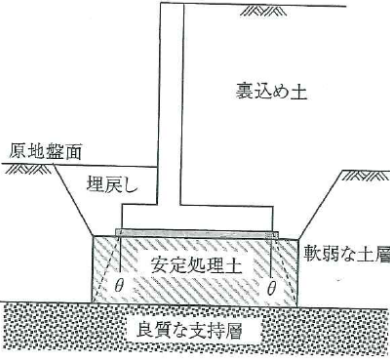
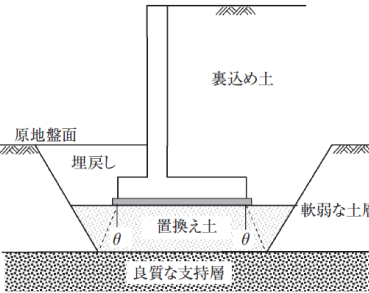
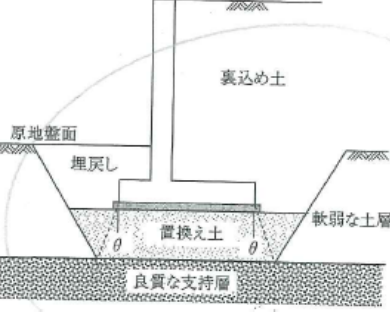
(2020 年 2 月 5 日更新)

箇所	修正前	修正後
p.60、5 行目 【参考】「遮音壁等に作用する風荷重の求め方」の用語の解説部分	P: 単位面積当たりの風荷重(kN/m ²)	P: 単位面積当たりの風荷重(N/m ²)

(第10刷まで反映)

箇所	修正前	修正後																																																																
p.3 上から 9 行目と 10 行目の間	「地盤材料試験の方法と解説」・・・ なお、これらの基準・指針類が改定され、・・・	「地盤材料試験の方法と解説」・・・ 「舗装の構造に関する技術基準・同解説」(平成 13 年; 日本道路協会) なお、これらの基準・指針類が改定され、・・・																																																																
p.13 下から 3 行目	・・・, 躯体に破壊が発生することもある。	・・・, 躯体の 破損 が発生することもある。																																																																
p.16 下から 2 行目	・・・, 擁壁が計画どおりに利用できる機能のことであり、・・・	・・・, 擁壁が計画どおりに 交通 に利用できる機能のことであり、・・・																																																																
p.17 下から 8 行目	軽減あるいは調和させること、周辺環境にふさわしい景観性を・・・	軽減あるいは調和させること、 及び 周辺環境にふさわしい景観性を・・・																																																																
p.27 解表 3-1 の表中	<table border="1"> <thead> <tr> <th>擁壁の種類</th> <th>適用されている主な擁壁高</th> <th>特徴</th> <th>主な留意事項</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>重力式擁壁</td> <td>・5m 程度以下</td> <td>・自重によって土圧に抵抗し、躯体断面には引張応力が生じないような断面とする。</td> <td>・基礎地盤が良好な箇所に用いる。 ・小規模な擁壁として用いることが多い。 ・杭基礎となる場合は適していない。</td> </tr> <tr> <td>もたれ式擁壁</td> <td>・10m 程度以下</td> <td>・地山または切土にもたれた状態で自重のみで土圧に抵抗する。</td> <td>・基礎地盤は堅固なものが望ましい。 ・比較的安定した地山や切土部に用いる。</td> </tr> <tr> <td>ブロック積(石積)擁壁</td> <td>・7m 以下</td> <td>・のり面下部の小規模な崩壊の防止、のり面の保護に用いる。</td> <td>・安定している地山や盛土など土圧が小さい場合に用いる。 ・構造として耐震性に劣る。</td> </tr> <tr> <td>大型ブロック積擁壁</td> <td>・8m 以下</td> <td>・のり面下部の小規模な崩壊の防止、のり面の保護に用いる。 ・ブロック間の結合を強固にした場合は、もたれ式擁壁に準じた適用が可能。</td> <td>・もたれ式擁壁に準ずる場合には、基礎地盤は堅固なものが望ましい。 ・比較的安定した地山や切土部に用いる。</td> </tr> <tr> <td>片持ばり式擁壁(逆 T 型、L 型、逆 L 型、控え壁式)</td> <td>・3～10m 程度</td> <td>・躯体自重とかがと版上の土の重量によって土圧に抵抗する。 ・たて壁、かかと版・つま先版は、各作用荷重に対し、<u>片持ちばり</u>として抵抗する。 ・擁壁高が高い場合は、控え壁式が有利となる。</td> <td>・杭基礎となる場合にも用いられる。 ・プレキャスト製品も多くある。 ・控え壁式の場合、躯体の施工及び裏込め土の転圧が難しい。</td> </tr> <tr> <td>U型擁壁</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>・掘削式で地下水位以下に適用する場合、水圧の影響や浮き上がりに対する安定を検討する必要がある。 ・掘削式で壁高が高い場合、側壁間にストラットを設けることがある。</td> </tr> <tr> <td>井げた組擁壁</td> <td>・15m 程度以下</td> <td>・プレキャストコンクリート等の部材を井げた状に組み中詰め材を充填するもので、透水性に優れている。</td> <td>・もたれ式擁壁に準じた設計を行う。</td> </tr> </tbody> </table>	擁壁の種類	適用されている主な擁壁高	特徴	主な留意事項	重力式擁壁	・5m 程度以下	・自重によって土圧に抵抗し、躯体断面には引張応力が生じないような断面とする。	・基礎地盤が良好な箇所に用いる。 ・小規模な擁壁として用いることが多い。 ・杭基礎となる場合は適していない。	もたれ式擁壁	・10m 程度以下	・地山または切土にもたれた状態で自重のみで土圧に抵抗する。	・基礎地盤は堅固なものが望ましい。 ・比較的安定した地山や切土部に用いる。	ブロック積(石積)擁壁	・7m 以下	・のり面下部の小規模な崩壊の防止、のり面の保護に用いる。	・安定している地山や盛土など土圧が小さい場合に用いる。 ・構造として耐震性に劣る。	大型ブロック積擁壁	・8m 以下	・のり面下部の小規模な崩壊の防止、のり面の保護に用いる。 ・ブロック間の結合を強固にした場合は、もたれ式擁壁に準じた適用が可能。	・もたれ式擁壁に準ずる場合には、基礎地盤は堅固なものが望ましい。 ・比較的安定した地山や切土部に用いる。	片持ばり式擁壁(逆 T 型、L 型、逆 L 型、控え壁式)	・3～10m 程度	・躯体自重とかがと版上の土の重量によって土圧に抵抗する。 ・たて壁、かかと版・つま先版は、各作用荷重に対し、 <u>片持ちばり</u> として抵抗する。 ・擁壁高が高い場合は、控え壁式が有利となる。	・杭基礎となる場合にも用いられる。 ・プレキャスト製品も多くある。 ・控え壁式の場合、躯体の施工及び裏込め土の転圧が難しい。	U型擁壁	—	—	・掘削式で地下水位以下に適用する場合、水圧の影響や浮き上がりに対する安定を検討する必要がある。 ・掘削式で壁高が高い場合、側壁間にストラットを設けることがある。	井げた組擁壁	・15m 程度以下	・プレキャストコンクリート等の部材を井げた状に組み中詰め材を充填するもので、透水性に優れている。	・もたれ式擁壁に準じた設計を行う。	<table border="1"> <thead> <tr> <th>擁壁の種類</th> <th>適用されている主な擁壁高</th> <th>特徴</th> <th>主な留意事項</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>重力式擁壁</td> <td>・5m 程度以下</td> <td>・自重によって土圧に抵抗し、躯体断面には引張応力が生じないような断面とする。</td> <td>・基礎地盤が良好な箇所に用いる。 ・小規模な擁壁として用いることが多い。 ・杭基礎となる場合は適していない。</td> </tr> <tr> <td>もたれ式擁壁</td> <td>・10m 程度以下</td> <td>・地山または切土にもたれた状態で自重のみで土圧に抵抗する。</td> <td>・基礎地盤は堅固なものが望ましい。 ・比較的安定した地山や切土部に用いる。</td> </tr> <tr> <td>ブロック積(石積)擁壁</td> <td>・7m 以下</td> <td>・のり面下部の小規模な崩壊の防止、のり面の保護に用いる。</td> <td>・安定している地山や盛土など土圧が小さい場合に用いる。 ・<u>耐震性に劣る</u>。</td> </tr> <tr> <td>大型ブロック積擁壁</td> <td>・8m 以下</td> <td>・のり面下部の小規模な崩壊の防止、のり面の保護に用いる。 ・ブロック間の結合を強固にした場合は、もたれ式擁壁に準じた適用が可能。</td> <td>・もたれ式擁壁に準ずる場合には、基礎地盤は堅固なものが望ましい。 ・比較的安定した地山や切土部に用いる。</td> </tr> <tr> <td>片持ばり式擁壁(逆 T 型、L 型、逆 L 型、控え壁式)</td> <td>・3～10m 程度</td> <td>・躯体自重とかがと版上の土の重量によって土圧に抵抗する。 ・たて壁、かかと版・つま先版は、各作用荷重に対し、<u>片持ちばり</u>として抵抗する。 ・擁壁高が高い場合は、控え壁式が有利となる。</td> <td>・杭基礎となる場合にも用いられる。 ・プレキャスト製品も多くある。 ・控え壁式の場合、躯体の施工及び裏込め土の転圧が難しい。</td> </tr> <tr> <td>U型擁壁</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>・掘削式で地下水位以下に適用する場合、水圧の影響や浮き上がりに対する安定を検討する必要がある。 ・掘削式で壁高が高い場合、側壁間にストラットを設けることがある。</td> </tr> <tr> <td>井げた組擁壁</td> <td>・15m 程度以下</td> <td>・プレキャストコンクリート等の部材を井げた状に組み中詰め材を充填するもので、透水性に優れている。</td> <td>・もたれ式擁壁に準じた設計を行う。</td> </tr> </tbody> </table>	擁壁の種類	適用されている主な擁壁高	特徴	主な留意事項	重力式擁壁	・5m 程度以下	・自重によって土圧に抵抗し、躯体断面には引張応力が生じないような断面とする。	・基礎地盤が良好な箇所に用いる。 ・小規模な擁壁として用いることが多い。 ・杭基礎となる場合は適していない。	もたれ式擁壁	・10m 程度以下	・地山または切土にもたれた状態で自重のみで土圧に抵抗する。	・基礎地盤は堅固なものが望ましい。 ・比較的安定した地山や切土部に用いる。	ブロック積(石積)擁壁	・7m 以下	・のり面下部の小規模な崩壊の防止、のり面の保護に用いる。	・安定している地山や盛土など土圧が小さい場合に用いる。 ・ <u>耐震性に劣る</u> 。	大型ブロック積擁壁	・8m 以下	・のり面下部の小規模な崩壊の防止、のり面の保護に用いる。 ・ブロック間の結合を強固にした場合は、もたれ式擁壁に準じた適用が可能。	・もたれ式擁壁に準ずる場合には、基礎地盤は堅固なものが望ましい。 ・比較的安定した地山や切土部に用いる。	片持ばり式擁壁(逆 T 型、L 型、逆 L 型、控え壁式)	・3～10m 程度	・躯体自重とかがと版上の土の重量によって土圧に抵抗する。 ・たて壁、かかと版・つま先版は、各作用荷重に対し、 <u>片持ちばり</u> として抵抗する。 ・擁壁高が高い場合は、控え壁式が有利となる。	・杭基礎となる場合にも用いられる。 ・プレキャスト製品も多くある。 ・控え壁式の場合、躯体の施工及び裏込め土の転圧が難しい。	U型擁壁	—	—	・掘削式で地下水位以下に適用する場合、水圧の影響や浮き上がりに対する安定を検討する必要がある。 ・掘削式で壁高が高い場合、側壁間にストラットを設けることがある。	井げた組擁壁	・15m 程度以下	・プレキャストコンクリート等の部材を井げた状に組み中詰め材を充填するもので、透水性に優れている。	・もたれ式擁壁に準じた設計を行う。
擁壁の種類	適用されている主な擁壁高	特徴	主な留意事項																																																															
重力式擁壁	・5m 程度以下	・自重によって土圧に抵抗し、躯体断面には引張応力が生じないような断面とする。	・基礎地盤が良好な箇所に用いる。 ・小規模な擁壁として用いることが多い。 ・杭基礎となる場合は適していない。																																																															
もたれ式擁壁	・10m 程度以下	・地山または切土にもたれた状態で自重のみで土圧に抵抗する。	・基礎地盤は堅固なものが望ましい。 ・比較的安定した地山や切土部に用いる。																																																															
ブロック積(石積)擁壁	・7m 以下	・のり面下部の小規模な崩壊の防止、のり面の保護に用いる。	・安定している地山や盛土など土圧が小さい場合に用いる。 ・構造として耐震性に劣る。																																																															
大型ブロック積擁壁	・8m 以下	・のり面下部の小規模な崩壊の防止、のり面の保護に用いる。 ・ブロック間の結合を強固にした場合は、もたれ式擁壁に準じた適用が可能。	・もたれ式擁壁に準ずる場合には、基礎地盤は堅固なものが望ましい。 ・比較的安定した地山や切土部に用いる。																																																															
片持ばり式擁壁(逆 T 型、L 型、逆 L 型、控え壁式)	・3～10m 程度	・躯体自重とかがと版上の土の重量によって土圧に抵抗する。 ・たて壁、かかと版・つま先版は、各作用荷重に対し、 <u>片持ちばり</u> として抵抗する。 ・擁壁高が高い場合は、控え壁式が有利となる。	・杭基礎となる場合にも用いられる。 ・プレキャスト製品も多くある。 ・控え壁式の場合、躯体の施工及び裏込め土の転圧が難しい。																																																															
U型擁壁	—	—	・掘削式で地下水位以下に適用する場合、水圧の影響や浮き上がりに対する安定を検討する必要がある。 ・掘削式で壁高が高い場合、側壁間にストラットを設けることがある。																																																															
井げた組擁壁	・15m 程度以下	・プレキャストコンクリート等の部材を井げた状に組み中詰め材を充填するもので、透水性に優れている。	・もたれ式擁壁に準じた設計を行う。																																																															
擁壁の種類	適用されている主な擁壁高	特徴	主な留意事項																																																															
重力式擁壁	・5m 程度以下	・自重によって土圧に抵抗し、躯体断面には引張応力が生じないような断面とする。	・基礎地盤が良好な箇所に用いる。 ・小規模な擁壁として用いることが多い。 ・杭基礎となる場合は適していない。																																																															
もたれ式擁壁	・10m 程度以下	・地山または切土にもたれた状態で自重のみで土圧に抵抗する。	・基礎地盤は堅固なものが望ましい。 ・比較的安定した地山や切土部に用いる。																																																															
ブロック積(石積)擁壁	・7m 以下	・のり面下部の小規模な崩壊の防止、のり面の保護に用いる。	・安定している地山や盛土など土圧が小さい場合に用いる。 ・ <u>耐震性に劣る</u> 。																																																															
大型ブロック積擁壁	・8m 以下	・のり面下部の小規模な崩壊の防止、のり面の保護に用いる。 ・ブロック間の結合を強固にした場合は、もたれ式擁壁に準じた適用が可能。	・もたれ式擁壁に準ずる場合には、基礎地盤は堅固なものが望ましい。 ・比較的安定した地山や切土部に用いる。																																																															
片持ばり式擁壁(逆 T 型、L 型、逆 L 型、控え壁式)	・3～10m 程度	・躯体自重とかがと版上の土の重量によって土圧に抵抗する。 ・たて壁、かかと版・つま先版は、各作用荷重に対し、 <u>片持ちばり</u> として抵抗する。 ・擁壁高が高い場合は、控え壁式が有利となる。	・杭基礎となる場合にも用いられる。 ・プレキャスト製品も多くある。 ・控え壁式の場合、躯体の施工及び裏込め土の転圧が難しい。																																																															
U型擁壁	—	—	・掘削式で地下水位以下に適用する場合、水圧の影響や浮き上がりに対する安定を検討する必要がある。 ・掘削式で壁高が高い場合、側壁間にストラットを設けることがある。																																																															
井げた組擁壁	・15m 程度以下	・プレキャストコンクリート等の部材を井げた状に組み中詰め材を充填するもので、透水性に優れている。	・もたれ式擁壁に準じた設計を行う。																																																															

p.28 解表 3-1の表中	<table border="1"> <thead> <tr> <th>擁壁の種類</th> <th>適用されている 主な擁壁高</th> <th>特 徴</th> <th>主な留意事項</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>補強土壁</td> <td>・3～18m程度</td> <td>・補強材と土の摩擦やアンカープレートの支圧によって土を補強して壁体を形成するもので、さまざまな工法がある。 ・壁面工の種類により緑化が可能である。</td> <td>・柔軟性のある構造であるため、ある程度の変形が生じる。 ・コンクリート擁壁に比べ規模が大きくなる場合もあるため、詳細な地盤調査を行う必要がある。 ・安定性は、盛土材と補強材、壁面の相互の拘束効果によるため、良質な盛土材を用い、施工・施工管理を確実に行う必要がある。 ・盛土に比べて変形・変状に対する修復性に劣る。 ・水による影響を受けやすいため、十分な排水施設を設ける。</td> </tr> <tr> <td>軽量材を用いた擁壁</td> <td>—</td> <td>・軽量材の種類により、さまざまな工法がある。 ・軟弱ないし比較的不安定な地盤でも擁壁の構築が可能となる場合がある。</td> <td>・水の浸入等による軽量材の強度低下や重量増加があるので、十分な排水処理を行う必要がある。</td> </tr> <tr> <td>その他の擁壁</td> <td colspan="3">・地形、地質・土質、施工条件、周辺環境、その他各種の制約条件等に応じて適宜採用される。</td> </tr> </tbody> </table>	擁壁の種類	適用されている 主な擁壁高	特 徴	主な留意事項	補強土壁	・3～18m程度	・補強材と土の摩擦やアンカープレートの支圧によって土を補強して壁体を形成するもので、さまざまな工法がある。 ・壁面工の種類により緑化が可能である。	・柔軟性のある構造であるため、ある程度の変形が生じる。 ・コンクリート擁壁に比べ規模が大きくなる場合もあるため、詳細な地盤調査を行う必要がある。 ・安定性は、盛土材と補強材、壁面の相互の拘束効果によるため、良質な盛土材を用い、施工・施工管理を確実に行う必要がある。 ・盛土に比べて変形・変状に対する修復性に劣る。 ・水による影響を受けやすいため、十分な排水施設を設ける。	軽量材を用いた擁壁	—	・軽量材の種類により、さまざまな工法がある。 ・軟弱ないし比較的不安定な地盤でも擁壁の構築が可能となる場合がある。	・水の浸入等による軽量材の強度低下や重量増加があるので、十分な排水処理を行う必要がある。	その他の擁壁	・地形、地質・土質、施工条件、周辺環境、その他各種の制約条件等に応じて適宜採用される。			<table border="1"> <thead> <tr> <th>擁壁の種類</th> <th>適用されている 主な擁壁高</th> <th>特 徴</th> <th>主な留意事項</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>補強土壁</td> <td>・3～18m程度</td> <td>・補強材と土の摩擦やアンカープレートの支圧によって土を補強して壁体を形成するもので、さまざまな工法がある。 ・壁面工の種類により緑化が可能である。</td> <td>・柔軟性のある構造であるため、ある程度の変形が生じる。 ・コンクリート擁壁に比べ規模が大きくなる場合もあるため、詳細な地盤調査を行う必要がある。 ・安定性は、盛土材と補強材、壁面の相互の拘束効果によるため、良質な盛土材を用い、施工・施工管理を確実に行う必要がある。 ・盛土に比べて変形・変状に対する修復性に劣る。 ・水による影響を受けやすいため、十分な排水施設を設ける。</td> </tr> <tr> <td>軽量材を用いた擁壁</td> <td>—</td> <td>・軽量材の種類により、さまざまな工法がある。 ・軟弱ないし比較的不安定な地盤でも擁壁の構築が可能となる場合がある。</td> <td>・水の浸入等による軽量材の強度低下や重量増加があるので、十分な排水処理を行う必要がある。</td> </tr> <tr> <td>その他の擁壁</td> <td colspan="3">・地形、地質・土質、施工条件、周辺環境、その他各種の制約条件等に応じて適宜採用される。</td> </tr> </tbody> </table>	擁壁の種類	適用されている 主な擁壁高	特 徴	主な留意事項	補強土壁	・3～18m程度	・補強材と土の摩擦やアンカープレートの支圧によって土を補強して壁体を形成するもので、さまざまな工法がある。 ・壁面工の種類により緑化が可能である。	・柔軟性のある構造であるため、ある程度の変形が生じる。 ・コンクリート擁壁に比べ規模が大きくなる場合もあるため、詳細な地盤調査を行う必要がある。 ・安定性は、盛土材と補強材、壁面の相互の拘束効果によるため、良質な盛土材を用い、施工・施工管理を確実に行う必要がある。 ・盛土に比べて変形・変状に対する修復性に劣る。 ・水による影響を受けやすいため、十分な排水施設を設ける。	軽量材を用いた擁壁	—	・軽量材の種類により、さまざまな工法がある。 ・軟弱ないし比較的不安定な地盤でも擁壁の構築が可能となる場合がある。	・水の浸入等による軽量材の強度低下や重量増加があるので、十分な排水処理を行う必要がある。	その他の擁壁	・地形、地質・土質、施工条件、周辺環境、その他各種の制約条件等に応じて適宜採用される。		
	擁壁の種類	適用されている 主な擁壁高	特 徴	主な留意事項																														
補強土壁	・3～18m程度	・補強材と土の摩擦やアンカープレートの支圧によって土を補強して壁体を形成するもので、さまざまな工法がある。 ・壁面工の種類により緑化が可能である。	・柔軟性のある構造であるため、ある程度の変形が生じる。 ・コンクリート擁壁に比べ規模が大きくなる場合もあるため、詳細な地盤調査を行う必要がある。 ・安定性は、盛土材と補強材、壁面の相互の拘束効果によるため、良質な盛土材を用い、施工・施工管理を確実に行う必要がある。 ・盛土に比べて変形・変状に対する修復性に劣る。 ・水による影響を受けやすいため、十分な排水施設を設ける。																															
軽量材を用いた擁壁	—	・軽量材の種類により、さまざまな工法がある。 ・軟弱ないし比較的不安定な地盤でも擁壁の構築が可能となる場合がある。	・水の浸入等による軽量材の強度低下や重量増加があるので、十分な排水処理を行う必要がある。																															
その他の擁壁	・地形、地質・土質、施工条件、周辺環境、その他各種の制約条件等に応じて適宜採用される。																																	
擁壁の種類	適用されている 主な擁壁高	特 徴	主な留意事項																															
補強土壁	・3～18m程度	・補強材と土の摩擦やアンカープレートの支圧によって土を補強して壁体を形成するもので、さまざまな工法がある。 ・壁面工の種類により緑化が可能である。	・柔軟性のある構造であるため、ある程度の変形が生じる。 ・コンクリート擁壁に比べ規模が大きくなる場合もあるため、詳細な地盤調査を行う必要がある。 ・安定性は、盛土材と補強材、壁面の相互の拘束効果によるため、良質な盛土材を用い、施工・施工管理を確実に行う必要がある。 ・盛土に比べて変形・変状に対する修復性に劣る。 ・水による影響を受けやすいため、十分な排水施設を設ける。																															
軽量材を用いた擁壁	—	・軽量材の種類により、さまざまな工法がある。 ・軟弱ないし比較的不安定な地盤でも擁壁の構築が可能となる場合がある。	・水の浸入等による軽量材の強度低下や重量増加があるので、十分な排水処理を行う必要がある。																															
その他の擁壁	・地形、地質・土質、施工条件、周辺環境、その他各種の制約条件等に応じて適宜採用される。																																	
p.38 下から1 行目	(注5) 切上部擁壁で切土のり面や地山斜面が・・・	(注5) 切土部擁壁で切土のり面や地山斜面が・・・																																
p.41 下から1 行目	ただし、設計で想定する地震動の設定に際して・・・	ただし、想定する地震動の設定に際して・・・																																
p.43 上から3 行目	・・・本来有すべき通行機能、及び避難路や救助・救急・医療・・・	・・・本来有すべき通行機能や避難路、救助・救急・医療・・・																																
p.43 上から 12行目	としての機能を確保できることを・・・	の機能を確保できることを・・・																																
p.43 上から 14行目	機能の回復が速やかに行いうる性能と定義した。	機能の回復が速やかに行い得る性能と定義した。																																
p.43 上から 15行目	・・・、擁壁としての機能が応急復旧程度の・・・	・・・、擁壁の機能が応急復旧程度の・・・																																
p.43 下から9 行目	擁壁に大きな変状が生じて、・・・	擁壁には大きな変状が生じて、・・・																																
p.83 上から5 行目	押抜きせん断応力度の照査にあたっては、・・・	押抜きせん断応力度の照査に当たっては、・・・																																
p.85 下から8 行目	・・・、コンクリートのひびわれが部材の耐久性に対して・・・	・・・、コンクリートのひび割れが部材の耐久性に対して・・・																																
p.107 上から 2行目	「4-2-4 (2)受働土圧」で示したように、・・・	「4-2-4 (2) 受働土圧」で示したように、・・・																																


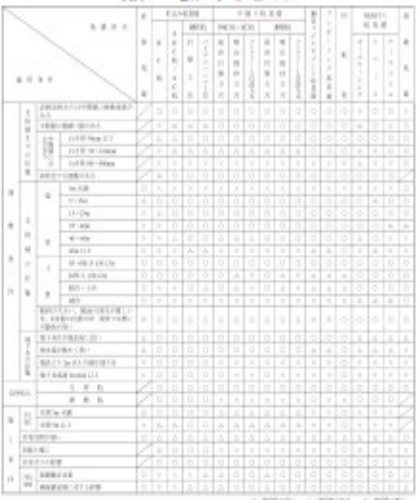
<p>p.133 解図 5-18(a)の図 中</p>		 <p>荷重分散の開始点の位置を擁壁底板に修正しました。</p>
<p>p.133 解図 5-18(b)の図 中</p>		 <p>荷重分散の開始点の位置を擁壁底板に修正しました。</p>
<p>p.145 解図 5-24の図中</p>	<p>(注) β および γ は、曲げモーメントの絶対値が増すに従って...</p>	<p>(注) β 及び γ は、曲げモーメントの絶対値が増すに従って...</p>
<p>p.146 下から 3行目</p>	<p>θ: 斜引張鉄筋が部材軸方向となす角度(°)</p>	<p>θ: 斜引張鉄筋が部材軸方向となす角度(°)</p>
<p>p.151 上から 12行目</p>	<p>..., コンクリートのひびわれ幅の制御, ...</p>	<p>..., コンクリートのひび割れ幅の制御, ...</p>
<p>p.153 上から 2行目(枠内)</p>	<p>..., コンクリートのひびわれとともに耐力が減じて...</p>	<p>..., コンクリートのひび割れとともに耐力が減じて...</p>
<p>p.153 上から 6行目(枠内)</p>	<p>..., 温度勾配等による有害なひびわれが発生しないように, ...</p>	<p>..., 温度勾配等による有害なひび割れが発生しないように, ...</p>
<p>p.153 上から 11行目</p>	<p>..., コンクリートのひびわれとともに耐力を減じ急激に破壊する...</p>	<p>..., コンクリートのひび割れとともに耐力を減じ急激に破壊する...</p>
<p>p.155 上から 7行目</p>	<p>2) コンクリート中に埋め込み, フックを付けて定着する。</p>	<p>2) コンクリート中に埋め込み, フックを付けて定着する。</p>
<p>p.155 上から 8行目</p>	<p>3) コンクリート中に埋め込み, 鉄筋に定着板等を取付け...</p>	<p>3) コンクリート中に埋め込み, 鉄筋に定着板等を取付け...</p>
<p>p.163 上から 4行目</p>	<p>..., 下記②に示すように適切に考慮する...</p>	<p>..., 以下②に示すように適切に考慮する...</p>
<p>p.167 下から 4行目</p>	<p>..., 固定端とする片持ちばりとして設計を行えばよい。</p>	<p>..., 固定端とする片持ちばりとして設計を行えばよい。</p>

p.172 上から 7行目	項に従うものとする	項に従うものとする。																
p.173 下から 5行目と3行 目の間	ブロック間の結合に、かみ合わせ構造や突起等を用いたり、胴込めコンクリートで練積にした形式等は、通常の練積に相当するブロック間の摩擦が確保されているとして、通常のブロック積擁壁に準じた構造と考えてよい。	ブロック間の結合に、かみ合わせ構造や突起等を用いたり、胴込めコンクリートで練積にした形式等は、通常の練積に相当するブロック間の摩擦が確保されてい れば 、5-7-4(3)の通常のブロック積擁壁に準じた構造の 大型ブロック積擁壁 と考えてよい。																
p.186 下から 1行目	せん断ひびわれ発生後、せん断耐力の・・・	せん断ひび 割れ 発生後、せん断耐力の・・・																
p.174 解表 5-7の表中	<table border="1"> <tr> <td>背面勾配</td> <td>1:0.3</td> <td>1::0.4</td> <td>1:0.5</td> </tr> </table>	背面勾配	1:0.3	1::0.4	1:0.5	<table border="1"> <tr> <td>背面勾配</td> <td>1:0.3</td> <td>1:0.4</td> <td>1:0.5</td> </tr> </table>	背面勾配	1:0.3	1:0.4	1:0.5								
背面勾配	1:0.3	1::0.4	1:0.5															
背面勾配	1:0.3	1:0.4	1:0.5															
p.175 解表 5-8の表中	<table border="1"> <tr> <td>背面勾配</td> <td>1:0.3</td> <td>1::0.4</td> <td>1:0.5</td> </tr> </table>	背面勾配	1:0.3	1::0.4	1:0.5	<table border="1"> <tr> <td>背面勾配</td> <td>1:0.3</td> <td>1:0.4</td> <td>1:0.5</td> </tr> </table>	背面勾配	1:0.3	1:0.4	1:0.5								
背面勾配	1:0.3	1::0.4	1:0.5															
背面勾配	1:0.3	1:0.4	1:0.5															
p.200 上から 3行目と4行 目の間	プレキャスト鉄筋コンクリート部材の鉄筋のかぶりは、「コンクリート標準示方書」に準じ鉄筋の直径以上とするほか、式(解5 - 43)による値以上を確保するのがよい。	プレキャスト鉄筋コンクリート部材の鉄筋のかぶりは、「コンクリート標準示方書」に準じ鉄筋の直径以上とする。 また 、式(解5 - 43)による値以上を確保するのがよい。																
p.200 上から 7行目	c_{min} : 鉄筋の最小かぶり(mm)	c_{min} : 鉄筋の最小かぶり(mm)																
p.200 上から 14行目と16 行目の間	ここに定めた値は最小値であり、プレキャスト製品の擁壁の種類、養生方法、構造物としての重要度、使用環境条件、設計耐用期間等を十分に考慮して、かぶりの最小値を定める必要がある。	鉄筋の最小かぶり は、プレキャスト製品の擁壁の種類、養生方法、構造物としての重要度、使用環境条件、設計耐用期間等を十分に考慮して定める必要がある。																
p.201 上から 11行目	・・・、過大なひびわれを防止する目的で、・・・	・・・、過大なひび 割れ を防止する目的で、・・・																
p.202 解表 5-11の表中	<table border="1"> <tr> <td rowspan="2">鉛直力</td> <td>押込み力</td> <td>底版コンクリートの垂直支圧および押抜きせん断抵抗</td> </tr> <tr> <td>引抜き力</td> <td>杭頭補強鉄筋の引張り抵抗</td> </tr> <tr> <td colspan="2">水平力</td> <td>底版コンクリートの水平支圧および底版端部の水平方向の押抜きせん断抵抗</td> </tr> </table>	鉛直力	押込み力	底版コンクリートの垂直支圧および押抜きせん断抵抗	引抜き力	杭頭補強鉄筋の引張り抵抗	水平力		底版コンクリートの水平支圧および底版端部の水平方向の押抜きせん断抵抗	<table border="1"> <tr> <td rowspan="2">鉛直力</td> <td>押込み力</td> <td>底版コンクリートの垂直支圧及び押抜きせん断抵抗</td> </tr> <tr> <td>引抜き力</td> <td>杭頭補強鉄筋の引張り抵抗</td> </tr> <tr> <td colspan="2">水平力</td> <td>底版コンクリートの水平支圧及び底版端部の水平方向の押抜きせん断抵抗</td> </tr> </table>	鉛直力	押込み力	底版コンクリートの垂直支圧及び押抜きせん断抵抗	引抜き力	杭頭補強鉄筋の引張り抵抗	水平力		底版コンクリートの水平支圧及び底版端部の水平方向の押抜きせん断抵抗
鉛直力	押込み力		底版コンクリートの垂直支圧および押抜きせん断抵抗															
	引抜き力	杭頭補強鉄筋の引張り抵抗																
水平力		底版コンクリートの水平支圧および底版端部の水平方向の押抜きせん断抵抗																
鉛直力	押込み力	底版コンクリートの垂直支圧及び押抜きせん断抵抗																
	引抜き力	杭頭補強鉄筋の引張り抵抗																
水平力		底版コンクリートの水平支圧及び底版端部の水平方向の押抜きせん断抵抗																
p.208 上から 2行目	・・・に採用されている。この他、裏込め土が粘性土のように・・・	・・・に採用されている。この ほか 、裏込め土が粘性土のように・・・																
p.222 参考文 献	1) 東日本高速道路株式会社, 中日本高速道路株式会社, 西日本高速道路株式会社: 設計要領第二集橋梁建設編, H22.7.	1) 東日本高速道路株式会社, 中日本高速道路株式会社, 西日本高速道路株式会社: 設計要領第二集橋梁建設編, 2012 .																
p.223 下から 8行目	材料との間の摩擦抵抗力または支圧抵抗力によって・・・	材 との間の摩擦抵抗力または支圧抵抗力によって・・・																
p.224 上から 4行目	・・・, 壁面工及び補強材, 盛土材料が相互に拘束し一体となって・・・	・・・, 壁面工及び補強材, 盛土材 が相互に拘束し一体となって・・・																

<p>p.225 解図 6-3(c)ジオテキスタイル補強土壁の図中</p>	 <p>(c) ジオテキスタイル補強土壁</p>	 <p>(c) ジオテキスタイル補強土壁</p>
<p>p.227 下から 7行目</p>	<p>④のような要因により盛土材料と補強材、壁面材との…</p>	<p>④のような要因により盛土材と補強材、壁面材との…</p>
<p>p.227 下から 5行目</p>	<p>料のこぼれ出しなどにより、…</p>	<p>のこぼれ出しなどにより、…</p>
<p>p.228 上から 8行目</p>	<p>盛土材料を選定し、盛土材料を十分に締め固めることが必要である。</p>	<p>盛土材料を選定し、十分に締め固めることが必要である。</p>
<p>p.229 下から 6行目</p>	<p>…補強領域内へ水が浸入した場合、盛土材料の強度低下が生じる。</p>	<p>…補強領域内へ水が浸入した場合、盛土材の強度低下が生じる。</p>
<p>p.229 下から 5行目</p>	<p>…、流入する水が多量になると、盛土材料の流出を引き起こすことがある。</p>	<p>…、流入する水が多量になると、盛土材の流出を引き起こすことがある。</p>
<p>p.229 下から 4行目</p>	<p>…水の浸入により盛土材料の強度低下や流出が生じた場合、…</p>	<p>…水の浸入により盛土材の強度低下や流出が生じた場合、…</p>
<p>p.230 解図 6-7</p>	<p>(b) 盛土材料の流出</p>	<p>(b) 盛土材の流出</p>
<p>p.230 下から 15行目</p>	<p>…壁面材の開きからの盛土材料のこぼれ出し等が発生し、…</p>	<p>…壁面材の開きからの盛土材のこぼれ出し等が発生し、…</p>
<p>p.230 下から 1行目</p>	<p>…、解図 6-8(b)に示すような補強土壁および基礎地盤を含む…</p>	<p>…、解図 6-8(b)に示すような補強土壁及基礎地盤を含む…</p>
<p>p.231 解図 6-8</p>	<p>(b) 補強土壁および基礎地盤を含む全体すべり</p>	<p>(b) 補強土壁及基礎地盤を含む全体すべり</p>
<p>p.232 上から 9行目</p>	<p>…変形量が大きくなると盛土材料のこぼれ出し等の重大な…</p>	<p>…変形量が大きくなると盛土材のこぼれ出し等の重大な…</p>
<p>p.232 上から 11行目</p>	<p>…。この他、砂質地盤では地震時の地盤の液状化による…</p>	<p>…。このほか、砂質地盤では地震時の地盤の液状化による…</p>
<p>p.233 上から 3行目</p>	<p>…冬季に盛土工を施工する場合、盛土材料に凍土や雪氷が…</p>	<p>…冬季に盛土工を施工する場合、盛土材に凍土や雪氷が…</p>
<p>p.238 下から 9行目</p>	<p>…安定性の検討(「6-5 (2)2)補強土壁及び基礎地盤を含む…</p>	<p>…安定性の検討(「6-5(2)2) 補強土壁及基礎地盤を含む…</p>
<p>p.238 下から 7行目</p>	<p>…地盤全体のすべり破壊や沈下等について検討をする。</p>	<p>…地盤全体のすべり破壊や沈下等について検討する。</p>

p.239 下から 1行目	・・・, 解図 6-10 に示すように補強領域を構成する盛土材料, 補強材, ・・・	・・・, 解図 6-10 に示すように補強領域を構成する 盛土材 , 補強材, ・・・
p.240 解図 6-10 の図中		
p.241 下から 8行目	部材の安全性の照査に用いる土圧は, 盛土材料により壁面材に作用する土圧とする。	部材の安全性の照査に用いる土圧は, 盛土材 により壁面材に作用する土圧とする。
p.242 上から 7行目	背面の盛土材料との境界である・・・	背面の 盛土材 との境界である・・・
p.243 上から 12行目	・・・, ②盛土材料及び背面盛土による地震時土圧, ③地盤の・・・	・・・, ② 盛土材 及び背面の 盛土材 による地震時土圧, ③地盤の・・・
p.244 解図 6-13 の図中		
p.244 下から 12行目	② 盛土材料及び背面盛土による地震時土圧	② 盛土材 及び背面の 盛土材 による地震時土圧
p.245 解図 6-14 の図中	W :土くさびの重量(kN/m)	W :土くさびの重量(kN/m) (ただし, 嵩上げ盛土がある場合は, 嵩上げ盛土を荷重に換算したものを含める。)
p.247 下から 3行目	・・・。このため改良材の使用にあたっては, 供用期間中の補強土壁の・・・	・・・。このため改良材の使用に 当 たっては, 供用期間中の補強土壁の・・・
p.248 下から 13行目	・・・, 並びに盛土材料との間で十分な引抜き抵抗力を・・・	・・・, 並びに 盛土材 との間で十分な引抜き抵抗力を・・・
p.248 下から 4行目	壁面材は, 盛土材料の崩落・こぼれ出しを防ぐとともに, ・・・	壁面材は, 盛土材 の崩落・こぼれ出しを防ぐとともに, ・・・
p.248 下から 3行目	・・・, 補強材と一体となって盛土材料を拘束し, 補強効果を発揮する・・・	・・・, 補強材と一体となって 盛土材 を拘束し, 補強効果を発揮する・・・
p.251 下から	・・・。なお, 配置間隔は, 盛土材料と補強材による拘束	・・・。なお, 配置間隔は, 盛土材 と補強材による拘束効

8 行目	効果を…	果を…
p.254 上から 3 行目	…, 補強材と盛土材料の間に生じるせん断抵抗力のうち…	…, 補強材と盛土材の間に生じるせん断抵抗力のうち…
p.262 上から 7 行目	…, 基礎地盤の洗掘や盛土材料のこぼれ出しが生じないように, …	…, 基礎地盤の洗掘や盛土材のこぼれ出しが生じないように, …
p.270 上から 7 行目(枠内)	(3) 壁面材の背面等には, 盛土材料のこぼれ出しを防止するための…	(3) 壁面材の背面等には, 盛土材のこぼれ出しを防止するための…
p.270 下から 8 行目	なお, 壁面材の脱落は盛土材料のこぼれ出しをまねき, …	なお, 壁面材の脱落は盛土材のこぼれ出しをまねき, …
p.271 上から 9 行目	…, 排水にともない背面の盛土材料が流出しないよう留意する。…	…, 排水にともない背面の盛土材が流出しないよう留意する。…
p.274 下から 11 行目	…, 補強土壁は, 盛土材料, 補強材, 壁面材が相互に…	…, 補強土壁は, 盛土材, 補強材, 壁面材が相互に…
p.274 下から 7 行目	…と補強材の敷設, 盛土材料のまき出し・締固めが繰り返される。	…と補強材の敷設, 盛土材のまき出し・締固めが繰り返される。
p.274 下から 5 行目	の敷設, 盛土材料の締固め等の確実な作業と…	の敷設, 盛土材の締固め等の確実な作業と…
p.278 下から 9 行目	…, 壁面の近傍の盛土材料の締固め不足は, 盛り立てに伴う盛土材料の圧縮沈下により, …	…, 壁面の近傍の盛土材の締固め不足は, 盛り立てに伴う盛土材の圧縮沈下により, …
p.279 上から 2 行目(枠内)	(1) 盛土材料の敷均しは, 補強材の設置間隔に応じて…	(1) 盛土材の敷均しは, 補強材の設置間隔に応じて…
p.279 上から 4 行目(枠内)	(2) 盛土材料の締固めは, 所要の締固め度を得られ, …	(2) 盛土材の締固めは, 所要の締固め度を得られ, …
p.279 上から 6 行目	一般に, 盛土材料の敷均しから締固めまでの一連の作業は, …	一般に, 盛土材の敷均しから締固めまでの一連の作業は, …
p.279 上から 13 行目	以下に, 補強土壁における盛土材料の敷均し, 締固めにおける…	以下に, 補強土壁における盛土材の敷均し, 締固めにおける…
p.279 下から 10 行目	(1) 盛土材料の敷均し	(1) 盛土材の敷均し
p.279 下から 9 行目	搬入された盛土材料は, …	搬入された盛土材は, …
p.280 下から 16 行目	(2) 盛土材料の締固め	(2) 盛土材の締固め
p.280 下から 3 行目	積雪寒冷地においては, 盛土材料に凍土や雪氷が混入すると…	積雪寒冷地においては, 盛土材に凍土や雪氷が混入すると…
p.281 上から 1 行目	3) 施工時および放置期間中の降雨対策	3) 施工時及び放置期間中の降雨対策

p.281 上から 2 行目	降雨時に盛土材料を仮置き、または・・・	降雨時に 盛土材 を仮置き、または・・・
p.281 上から 4 行目	・・・浸入を最小限に止めるため、仮置き場の盛土材料はシートで覆い、・・・	・・・浸入を最小限に止めるため、仮置き場の 盛土材 はシートで覆い、・・・
p.281 上から 5 行目	・・・、盛り立て作業は盛土材料を敷き均した状態で作業を終了せず、・・・	・・・、盛り立て作業は 盛土材 を敷き均した状態で作業を終了せず、・・・
p.300 下から 5 行目	気泡混合軽量土はひびわれ等の損傷に対して・・・	気泡混合軽量土はひび 割れ 等の損傷に対して・・・
p.312 上から 7 行目	・・・、変状・損傷の原因、およびその位置や程度により、・・・	・・・、変状・損傷の原因、 及 びその位置や程度により、・・・
p.314 下から 1 行目	による基礎周辺の補強および支持力の増加を・・・	による基礎周辺の補強 及 び支持力の増加を・・・
p.324 資表 2-1	 <p>本資料は「道路標示方書-解説 下部構造編」の「参考資料 1. 基礎形式選定表」に基づき、擁壁の基礎形式の選定を補助することを目的とし、各基礎の一般的な適用性について示したものである。したがって、本資料において適用性が高いと判定される場合でも、施工場所の条件において適用できない可能性があること、また、適用性が低いと判定される場合でも、個別に検討するなどして適用できる可能性があることを十分に考慮しておく必要がある。</p>	 <p>本資料は「道路標示方書-解説 下部構造編」の「参考資料 6. 基礎形式の適用性」等を参考に、擁壁の基礎形式の選定を補助することを目的とし、各基礎の一般的な適用性の目安について示したものである。したがって、本資料において適用性が高いと判定される場合でも、施工場所の条件において適用できない可能性があること、また、適用性が低いと判定される場合でも、個別に検討するなどして適用できる可能性があることを十分に考慮しておく必要がある。</p> <p>表を差し替えました。</p>
p.327 上から 10 行目	・・・。この他、擁壁構造形式に拘らず、弾塑性有限要素法を用いて・・・	・・・。この ほか 、擁壁構造形式に拘らず、弾塑性有限要素法を用いて・・・
p.334 資図 3-4	資図 3-4 根入れの有無による耐震性の違い ¹²⁾	資図 3-4 根入れの有無による耐震性の違い ¹²⁾
p.334 参考文献	5) 古関潤一: 裏込め土中での滑り面発生に伴うひずみ軟化挙動を考慮した地震時土圧算定法(修正物部岡部式), 土木技術 平成 18 年 2 月号, Vol.61, No.2.	5) 古関潤一: 裏込め土中での滑り面発生に伴うひずみ軟化挙動を考慮した地震時土圧算定法(修正物部岡部式), 土木技術, Vol.61, No.2, pp.46-52, 2006.
p.335 参考文献	9) 松尾修, 塚田幸弘, 堤達也, 宮武裕昭, 齋藤由紀子: 兵庫県南部地震により被災した道路構造物の事例解析, 土木技術資料, Vol.39, No.3, pp.38-43, 1997.	9) 松尾修, 塚田幸弘, 堤達也, 宮武裕昭, 齋藤由紀子: 兵庫県南部地震により被災した道路構造物の事例解析, 土木技術資料, Vol.39, No.3, pp.38-43, 1997.

p.342 参考文献	1) (社)全国地質調査業協会連合会:道路防災点検の手引き, 2011.11.	1) (社)全国地質調査業協会連合会:道路防災点検の手引き, 2011.
------------	---	--------------------------------------